

主 題：主を礼拝する理由とその方法  
聖書箇所：エペソ人への手紙 1章3－6節

近藤牧師から＝神は私たちのこの群れにいろいろな恵みを与えてくださっています。その中の一つというのが、私たちのところでみことばを講解する働き人を育てるということです。本日、午後3時から神学校の卒業式が行なわれますが、そのときも繰り返すことになるかもしれませんが、世界13ヶ国でこのような働きがなされています。今、16の学校がマスターズ・アカデミー・インターナショナルという組織に迎えられて、その一員として世界中で同じことを行なっています。場所がどこであれ、みことばを正しく講解する働き人を育成するというのが、このマスターズ・アカデミー・インターナショナルが世界的に行なっていることです。私たちのところに届く様々なニュースレターでは、ニュージーランドにおいて、また、南アフリカにおいてロシアにおいてイタリアにおいてドイツにおいて、様々なところで同じように卒業式が行なわれています。マスターズ・アカデミー・インターナショナルの日本校が私たちのこの浜寺聖書学院です。非常に大きな責任であり、また、非常に大きな名誉であると私たちは思います。皆さんの属している教会がそのように世界的に働き人を輩出する学校として認められているのです。卒業証書を式の後でぜひ見てください。そこには世界共通のシールが張られています。それはこの卒業生は世界中どこに行ってもマスターズ・アカデミー・インターナショナルの卒業生として認められるのです。その意味で私たちが期待することは、アカデミックな面においてどれだけのことを知っているかよりも、どのような信仰者としてそれぞれが生きているかであり、どのような生き方をもってキリストを証しているかということ、そして、神のおことばを正しく伝えることができる、そこに重点を置いて私たちはこのトレーニングを続けています。今、私たちはこのようにロウ者の皆さんとともに神を崇める機会が与えられています。そのすべてが始まったのは、8年前に、湊崎先生にお会いして、何よりも今日卒業しようとしている湊崎純くんが、この教会に来て神によって変えられて、通訳者として用いられてからこの働きが始まりました。今日卒業する幸田さんも湊崎純兄がいなければ、勉強も今のように進んでいなかったはずです。ということで神がこのような機会を与えてくださった、そして、その純兄が一応卒業ということで、これからも学びが続いて行きますが、今日、卒業します。そのために、実は、これは去年から始まっていますが、卒業式が行なわれるその日に卒業生がメッセージをするということで、今年は卒業生が二人いますから、第一礼拝は幸田兄が、第二礼拝は湊崎純兄がメッセージを取り次いでくれます。神のみわぎを期待しながら、「どうぞ主よ、みことばを通して私に語ってください」という祈りをもってみことばを聞いていただきたいと思います。

鹿児島からこの浜寺に来て、当初3ヵ月で帰るはずだったのが、いつの間にか8年になりました。普段は、今、八木姉が立っているところに私は立っています。私がこのようにメッセージをすると決まってから、多くの人たちが私のために祈ってくださっていることを本当に感謝します。同時に、通訳者も非常にプレッシャーがあると思いますので、通訳者のために祈ってください。

では、皆さんと一緒にみことばを見ていきたいと思います。

その前に、まず皆さんに幾つか質問をさせてください。皆さんはなぜ、日曜日、このようにしてこの場に来ているのでしょうか？この当たり前の質問に対して、恐らく皆さんは「主を礼拝するためですよ」と答えてくださることでしょう。では、皆さんはなぜ主を礼拝するのでしょうか？皆さんはなぜ主をほめたたえるのでしょうか？日曜日のこの時間に、皆さんはここに座っているから礼拝ができていえるのでしょうか？恐らく、多くの皆さんは、日曜日だけが礼拝ではないということを知っておられると思います。この場所に集った時だけが礼拝だというわけではありません。恐らく、ここにいる中学生の皆さんも「毎日が礼拝です」と答えてくれると思います。では、毎日どのように礼拝をしているのでしょうか？神を礼拝すると言っても、どのような理由で私たちは神を礼拝しているのでしょうか？また、どのようにして私たちは神を礼拝しているのでしょうか？そのことを知ることがなければ、私たちは正しく神を礼拝すること、神を崇めることはできません。パウロはそのことについて答えを与えてくださっています。今日は皆さんと一緒にエペソ1：3－6を見て行きます。この箇所から、私たちはなぜ主を礼拝するのか、そして、どのように礼拝するのか、

そのことについて学んで行きたいと思います。それによって、私たちが正しい方法で神の栄光をほめたたえる者となることを願っています。

## 1. 神を礼拝する理由

まず最初に、このエペソの手紙の1：3－14を読みます。「**3 私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神はキリストにおいて、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちに祝福してくださいました。**：4 すなわち、神は私たちが世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。：5 神は、ただみこころのままに、私たちにイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ決めておられたのです。：6 それは、神がその愛する方によって私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。：7 私たちは、この御子のうちにあつて、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。：8 神はこの恵みを私たちの上にあふれさせ、あらゆる知恵と思慮深さをもって、：9 みこころの奥義を私たちに知らせてくださいました。それは、神が御子においてあらかじめお立てになったご計画によることであつて、：10 時がついに満ちて、この時のためのみこころが実行に移され、天にあるものも地にあるものも、いっさいのものが、キリストにあつて一つに集められることなのです。このキリストにあつて、：11 私たちは彼にあつて御国を受け継ぐ者ともなったのです。私たちは、みこころによりご計画のままをみな実現される方の目的に従つて、このようにあらかじめ定められていたのです。：12 それは、前からキリストに望みをおいていた私たちが、神の栄光をほめたたえる者となるためです。：13 またあなたがたも、キリストにあつて、真理のことば、すなわちあなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことによつて、約束の聖霊をもって証印を押されました。：14 聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証であります。これは神の民の贖いのためであり、神の栄光がほめたたえられるためです。」。

この箇所は一つのまとまりになっています。ここには「神の救いの計画について」書かれています。この中でパウロが繰り返し伝えていることは「神の栄光がほめたたえられるため」です。3節、6節、12節、14節で繰り返し言っています。特に、この3節でパウロは「**私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように**」と述べています。原文では「**ほめたたえられますように**」ということばが文頭に来ています。つまり、「神がほめたたえられるべきです」と強く訴えているのです。パウロは「神がほめたたえられるべきだ」と強く訴えているのですが、なぜ、パウロはそのように強く訴えているのでしょうか？パウロは、そのほめたたえられるべき神が、私たちに何をしてくださったのかを教えるがゆえに、その方がほめたたえられるべきだと言っているのです。神が私たちに對して何をしてくださったのか、それはここに書かれているとおり、「**私たちに祝福してくださいました**」と言います。どのような祝福でしょう？ここには「**天にあるすべての霊的祝福**」だと書かれています。

### ◎天にある霊的祝福とは？

これは決して、世が与えてくれるような物質的な、つまり、人が祝福だと思うようなもの、大きな家であったり、また、高級な車であったり、金銭的なものでもなく、また、地位や名誉といったものではありません。その祝福というのは、キリストにあつて与えられるものです。キリストを抜きにしては決して与えることのできないものだと教えてくれます。この世のどのようなものであつても与えることのできない祝福を神が与えてくださったゆえに、その神がほめたたえられるべきなのだと言うわけです。

けれども、単に「**霊的祝福**」ということだけを聞いてもなかなかピンと来ません。「**キリストにおいて、天にあるすべての霊的祝福**」というのは具体的にどのようなものでしょう？それは、パウロが次の4節で「**すなわち、**」ということばを記していることから分かるように、4節から14節までに、神が私たちに与えてくださった霊的祝福の内容が書かれています。そこには、キリストによつて様々なものが与えられている、「**天にある霊的祝福**」はこれだと教えているのです。

#### 1) 選び

その中で、最初にパウロが教えてくれる、神が私たちに与えてくださったすばらしい祝福は「**選び**」だ言います。私たちがこの箇所を見る時に、神が私たちを選んでくださったということを見ることが出来ます。けれども、時として私たちは信仰を持った時に、自分がキリストを信じるということを選択したかのように思います。みことばが教えていることは神が私たちを選んだということです。

##### (1) 神の主権的行為

では、どのように選んだのでしょうか。ここには「**神は私たちが世界の基の置かれる前からキリストのうちに選**

び」と書かれています。ここの主語は「神」です。つまり、「選び」は神の主権的行為を表わしています。神は世界を創造する以前から、私たちを選んでくださったのです。世界が造られる前から私たちを選んでくださっているのであれば、選びの基準は、私たちのすばらしい功績やすぐれた能力とは関係ありません。また、立派な人格者だからというのでもありません。神は私たちが存在する前から、私たちのことを選んでくださっていました。私たちが何かをしたから、また、私たちが信じるということを選択することを神が知っておられたからというわけでもありません。なぜなら、次の5節を見るとこのように書かれています。「**神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ決めておられたのです。**」と書いてあります。「**神は、ただみこころのままに**」と書かれているとおり、すなわち、神の考えに基づいて選んでおられるということです。神のみこころは決して他のものによって意見を決定されるようなものではありません。だれかが何かを言ったから神はそのように決めます、だれかがこれをしたから神はこのことを決めますと、そのようなことはされません。私たちを選ぶ時も同じです。私たちが何か良いことをしたから神が私たちを選んでくださったというわけではありません。また、反対に、悪いことをしているから選ばないというわけでもありません。聖書は神はだれの意見も必要としないと言っています。神にアドバイスをすることなどできないのです。イザヤ書40：13-14を見てください。「**だれが主の霊を推し量り、主の顧問として教えたのか。：14 主はだれと相談して悟りを得られたのか。だれが公正の道筋を主に教えて、知識を授け、英知の道を知らせたのか。**」、神が私たちを選ぶ時「あの人を選んでください、あの人を選んだ方がいいですよ、」などと、だれかの意見によって神は左右されることはないのです。また、その人が優れているから、すばらしい人だから選ぶというわけでもありません。事実、イスラエル人たちの例を見てもそうです。申命記7：6-8を見てもそのことが分かります。「**あなたは、あなたの神、主の聖なる民だからである。あなたの神、主は、地の面のすべての国々の民のうちから、あなたを選んでご自分の宝の民とされた。：7 主があなたがたを恋慕って、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの民よりも数が多かったからではない。事実、あなたがたは、すべての国々の民のうちで最も数が少なかった。：8**しかし、主があなたがたを愛されたから、また、あなたがたの先祖たちに誓われた誓いを守られたから、主は、力強い御手をもってあなたがたを連れ出し、奴隷の家から、エジプトの王パロの手からあなたを贖い出された。」。このように旧約時代においても、イスラエル人たちが選ばれたのは他の国よりも人の数が多かったからというわけでもなく、何か優れていたからというわけでもありません。私たちはみことばから、神がみこころのままに私たちを選んでくださったのだということを見るのです。

しかし、このようなことを聞くとある人はこう言うでしょう。「どんなに良いことをしても、神が選ばないなら救われない、それは不公平ではないですか?」、「神が選ぶ人もいれば選ばない人もいるなんて不公平ではないですか?」と。けれども、私たちが絶対に忘れてはいけないこと、また、聖書が教えていることは、私たちは本来、選ばれる価値のないものだということです。なぜなら、私たちは罪に汚れ果てていて、どうしようもない存在なのです。エペソ人への手紙2：1からも、パウロはそのことを教えてくれます。私たちは私たちを造ってくださった神を神として崇めず、感謝もせず、神に逆らう者でした。神を喜ばせる選択をするのではなく、むしろ、サタンを喜ばせる選択をする者でした。そのように罪の中を歩んでいた私たちであったにもかかわらず、神はその滅んでしかるべき私たちを選び、救いを与えてくださったのです。本来、神はそうする責任も義務もありません。罪に汚れ果てた私たちにふさわしいのは滅びであって、救いではありません。神は決して不公平な方ではありません。皆さん想像してみてください。あるお金持ちが今この礼拝堂に入って来たとしみましょう。その中で、そのお金持ちが「この礼拝堂にいる5人だけを私の家に招待したいと思います。そこで1週間、好きなように過ごしてください、くつろいでください。」と言ったとしみましょう。そのお金持ちがこの中から5人の人を選んで連れて行ったとします。残った皆さんはそのお金持ちに対して「あなたはなんて不公平だ」と言って指差すでしょうか。決してそういうことは言えません。

同じように、神は決して不公平な方ではありません。むしろ、神に選ばれることの方が不思議なのです。それゆえに、この「選び」というのは、神からの恵みであり、祝福なのです。本当にこのことを理解するならば、皆さん、感謝したくありませんか?恐らく、大金持ちに選ばれたその5人は選んでくださった人に感謝するでしょう。私たちも神に選ばれたということをしつかりと理解しているなら、神に対する感謝が出て来るはずで、パウロが「私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられるべきです」と強く訴える理由がよく分かります。私自身、神の選びというその祝福を知る時に、神に感謝し、神をほめたたえたいと願っています。私たちは、神が私たちを選んでくださったゆえに、神に感謝し、神をほめたたえるべきな

のです。

## 2. どのようにして神を礼拝するのか

パウロは、4 - 5節の中で三つのことを教えています。そこから、私たちはどのようにして神をほめたたえるのか、そのことについて学んで行きます。

### 1) 私たちが選ばれた目的

#### (1) 私たちを聖い者に変えるため

4節の終わりに「**キリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。**」とあります。「御前で聖く、」とありますが、この「聖い」ということばは、罪の全くない状態や罪とは反対のことばと考えますが、確かにそのとおりです。けれども、さらに「聖い」というこのことばは、皆さん聞かれたことがあると思いますが、「聖別する」、「分離する」、また「異なる」といった意味があります。ですから、「聖くなる」というのは、罪から遠く離れた、分離された状態のことだと教えてくれるのです。神がクリスチャンを選んだのは、罪人の中から選び出し、今までとは異なった生き方をする者へと変えてくださるという目的があったわけです。それゆえに、私たちは救われる前とは異なった「聖い」生き方をするようになるのです。救われる前とは異なった価値観を持つようになり、何よりも、救われる前とは異なった心を私たちは持つようになったのです。神によって聖い者とされる、神はその目的をもってくださっています。私たちはその神の目的に沿って歩もうとしているのでしょうか。私たちが神の目的に沿って聖い生き方をして行こうとする時に、世の神を知らない人たちは、神の聖さに敵対しているがゆえに、その生き方を好みません。そのとき、私たちはある誘惑に直面します。

例えば、仕事場の同僚と集った時に、たまたまだれか同僚の悪口を言い始めたとします。その同僚が皆さんに対して、その悪口に同意を求めようとして聞いてきた時に、皆さんはどうしますか？ここで嫌われたらまずいと思って同意をしてしまうことがないでしょうか？良くないと分かっているながら、この先友人関係がまずくなる、そうすると伝道できないと、いろいろな言い訳を頭の中で考え、神の目的に沿わないことを言ったり、行なったりしてしまうことはないでしょうか？確かに、私たちが選ばれた者として聖い生き方をして行こうとするなら、世の中の人々は聖い生き方をしようとしている私たちが煙たがる時があります。恐らく、皆さんも家族や友人からそのような扱いを受けたことがあるかもしれません。そのような時、私たちには選択があります。神の目的に沿って歩むのか、それとも妥協して聖さを求めない生き方をして行くのか…。皆さんはどちらを選択しますか？ある本を読んでいるとき、このようなことが書かれていました。「今日、キリスト者の間では、この世の人々と違わないようにという考え方が一般的になり、聖さというのがほとんど顧みられなくなってしまった。そのため、世の人々がキリスト者に神の聖さを見ることができなく、キリスト者が世の人々と何ら変わらない生き方をしている」と、そのようなことが指摘されていたのです。私たちは何のために選ばれたのかということをしかりと理解しなければいけません。そして、単に「分かりました、こうしないとイケないですね」と、頭で理解するだけでなく、私たちは自分が聖い生き方、神の目的に沿って歩んでいるのかどうか、いつも自分自身の行動を吟味しなければいけません。

#### (2) 完全な者にするため

それだけでなく、神が私たちを選んだ目的は完全な者としようとするためでした。この「**傷のない**」ということばは、「非の打ちどころがない」、「非難されるところがない」という意味があります。これは旧約時代、いけにえを捧げることに強く関わりのあることばです。いけにえを捧げる時、その動物が神に捧げるのにふさわしいかどうかということを調べる時に用いたことばです。もし、その動物に傷があるなら、そのいけにえは拒まれてしまいます。最上のものだけが神に捧げるのにふさわしいものなのです。ですから、クリスチャンが神によって選ばれたのは、神の前に出て行くのにふさわしい、最良の、非難されるところのない完全な者へと変えるためなのです。神は私たちを変えようとしてくださっているにもかかわらず、私たちは、罪がある欠陥だらけの人間だから仕方がないとか、私は罪深い人間だから、自分の態度やことば、行動、思いを変えることはできませんと言って、ほとんどの場合、変えたくないと思えるわけですが、このような言い訳をして、神の目的に沿って生きることをしなくても構わないとしてしまっている時があります。

神の選びの目的は、私たちを聖い者へ、また、傷のない完全な者にするということでした。皆さんは神が私たちを選んだのは、私たちを聖い完全な者へと変えようとしてくださっているということを知っておられますか？皆さんは神の目的に沿って歩もうとしておられるのでしょうか？多くの場合、私たちは神を知ってい

ると言いながら、言い訳をし、目的に沿う歩みをしない時があります。私たちはこの神の目的に沿って歩まなければいけません。なぜなら、神がその目的のために私たちを選んでくださったからです。

## 2) 私たちを聖い完全な者にしてくださる、その理由

では、神はなぜ、私たちをこのように聖い完全な者に変えようとしてくださるのでしょうか？ 5節にその理由が書かれています。それは「**私たちがイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。**」

### (1) ご自分の子にするため

それは、神が私たちを「**ご自分の子にしようと**」するためでした。なぜなら、神は聖い完全なお方ですから、その神の子どもは聖い完全な者でなければいけないわけです。この「**子にする**」ということばは、「養子にする」という意味ですが、このことばをパウロは書簡の中で何回か使っています。ガラテヤ人への手紙4章やローマ人への手紙8章などで使っていますが、パウロはこのことばを用いる時に、幾つかの箇所で「**律法の奴隷の下にある人々を贖い出し、神の子どもとされる**」というようなことが書かれています。ガラテヤ4：5-7を見てください。「**これは律法の下にある者を贖い出すためで、その結果、私たちが子としての身分を受けるようになるためです。：6 そして、あなたがたは子であるゆえに、神は「アバ、父。」と呼ぶ、御子の御霊を、私たちの心に遣わしてくださいました。：7 ですから、あなたがたはもはや奴隷ではなく、子です。子ならば、神による相続人です。**」とあります。私たちには神の子どもとされる身分が与えられているのです。それには特権と義務が伴ってきます。子は親の相続人になる特権が与えられており、また、父と交わる特権が与えられています。また、子は親に従順になるという義務が与えられています。このような神の子どもとされる特権というのは、先ほど見たガラテヤ4：6やローマの8：15に書かれているとおり、「**御霊の働き**」であることが教えられています。御霊の働きによって、私たちは神の子とされるわけです。それゆえに、クリスチャンの内側にいてくださる聖霊に導かれて歩まなければいけないのです。ローマ8：14-15を見てください。「**神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです。：15 あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、「アバ、父。」と呼びます。**」と書かれています。

「**神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです。**」と、当然、神の子どもは「**御霊に導かれる人**」とも言えるわけです。「**御霊の思いに満たされる**」とか、「**御霊に導かれる**」とはどのようなことを言っているのかと言うなら、神に喜ばれることをしたいとその人が願い、みことばを通して神に喜ばれることは何なのかを知り、それに従って歩む、その歩みのことです。神が喜ばれることは何であるかということを知って、それに従って歩む、その歩みが子にふさわしい歩みであると言えます。

神は聖い完全なお方であるなら、私たちも聖く完全になって行かなければいけません。一般的に、子は親に似るとよく言いますが、ここに父がいるので余り言いたくないのですが、私自身もよく父に似ていると言われます。それは、幼いころから父と多くの時間を過ごし、その中で話し方や仕草、考え方というのが似て来たわけです。皆さんは、皆さんの父である神のご性質に似た者となっているのでしょうか？皆さんは神の子どもとされた者であれば、その神と交わる特権を持っています。皆さんは父である神と個人的な関係を持ち続け、その神の影響というものを受けているのでしょうか？神に似た者となっているのでしょうか？父である神が聖であるように、私たちは聖さを求めていかなければいけません。父が完全であるように私たちもその方の子にふさわしく完全を目指して行かなければいけません。神は私たちをご自分の子にするために、聖い完全な者へ変えようとしてくださっているのです。ですから、私たちは父である方と個人的な関係を持ち続けるべきなのです。

### 3) どのように神をほめたたえるのか

では、どのようにほめたたえるのか、最初の質問に戻るわけですが、私たちが神の子どもとして聖い者へと完全な者へと変えられて行く、そのことによってどうなっていくのでしょうか？そのことが6節に教えられています。「**それは、神がその愛する方によって私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。**」と。私たちを通して神の「**恵みの栄光がほめたたえられる**」とはどういうことでしょうか？先ほども見たとおり、私たちは本来、罪に汚れ果てた者であり、滅びが最もふさわしい者であるわけです。自分たちの力、努力で自分自身を聖い者へと、完全な者へと変えることは絶対にできません。しかし、そのような私たちが神の子どもにふさわしく、神によって聖く完全な者へと変えられて行くなら、その働きをなしてくださった、すばらしいみわざをなしてくださった神がほめたたえられるわけです。

神は、何の価値もない私たちを選んでくださり、私たちを聖い者へ、完全な者へ変えようとしてくださっているのです。だから、恵みなのです。神の救いの計画というのは、このように罪深い人間を選び、聖い者へと変えることによって、完全な者へと変えることによって、神のすばらしさを現わそうとしておられます。つまり、神はここにいる皆さんを、神の栄光を現わすために用いようとしてくださっているわけです。本来、罪ゆえに滅んで当然の者が、創造された時の目的を全く果たさない、役に立たない者が、神によって贖われ、神のすばらしさを現わすために用いられること、本来、造られた目的を果たすことができるようになることというのは、私たちクリスチャンにとって大きな祝福です。

皆さんは神によって選ばれたことを感謝しておられますか？その感謝をどのように現わしておられますか？皆さんは、聖く完全にするという神の目的に沿って歩み続けることによって、主を崇めることができるのです。神を礼拝し続けることができるのです。それを通して、皆さんの感謝を神に表わして行くことができます。

今日、私たちは、このエペソ1：3－6を見て来ました。そこから、私たちはなぜ神を礼拝するのかということを見てきました。それは、神がどうしようもなく汚れ果てた罪人である私たちを選んでくださったからです。このようなすばらしい祝福をいただいたのだということを見てきました。それだけでなく、私たちはどのようにして主を礼拝するのかということを見てきました。今まで見てきたように、罪に汚れ果てた私たちが聖い者へ変えられて行くことによって、神がほめたたえられるのです。また不完全な私たちが完全な者へ変えられて行くことによって、神がほめたたえられるのです。皆さんは今までどのようにして神を礼拝して来られましたか？これからはどのように神を礼拝するのでしょうか？皆さんが神に神ご自身の聖さ、完全さを求めるなら、必ず、神は皆さんを用いて、神ご自身の栄光を現わしてください。そして、その神を大いに崇めることができるのです。問題は、皆さんが変えられて行くことを願っているかどうかです。私が願うことは、皆さんが神を崇めたいという願いを持って、ますます聖くなって行き、ますます完全な者になって行くことを通して、皆さんの生涯すべてにおいて主を崇めてくださることです。